

平成19年 7月3日	農作物病虫害発生予報 7月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
---------------	--------------------------------	----------------------------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	10
III	病虫害・農薬情報	
	病虫害メモ	
	ダイズのカメムシ防除	10
	イチゴの土壌病害	11
IV	参考(予報の見方、気象予報、7月のテレホンサービスの内容)	12

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(葉いもち)	やや少	少	前年並
	紋枯病	やや少	—	—
	セジロウンカ	平年並	平年並	少
	トビイロウンカ	平年並	平年並	少
	コブノメイガ	平年並	平年並	前年並
	斑点米カメムシ類	やや多	やや多	前年並
カンキツ	かいよう病	平年並	平年並	少
	黒点病	平年並	平年並	多
	ミカンハダニ	やや多	やや多	多
	チャノキイロアザミウマ	やや多	やや多	多
	ミカンサビダニ	やや多	やや多	多
ナシ	黒斑病	やや多	やや多	多
果樹全般	カメムシ類	平年並	平年並	少

作物	担当者
普通作	野崎(病害) 中川浩二(虫害)
果樹	藤村(病害) 殿河内(虫害)
野菜	岡田(病害) 畑中(虫害)
茶	畑中(病虫害)

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

II 予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	少	前年並	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 葉いもち発生予察システム（BLASTAM）によると、中山間地域の葉いもちの発生と相関が高い広瀬、徳佐、秋吉台、西市のアメダスにおける6月6日～20日の好適条件出現回数は3回（平年1.8回）で平年並みであった（±）。

イ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%（平年3.1%）で平年に比べ少なかった。また、初発生は認められず（平年初発生日：6月23日）、平年に比べ遅かった（-）。

ウ 気象予報では、7月の気温、降水量は平年並み、日照時間は少ない（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

ア 補植用苗は発生源となるので、補植が終わり次第早急に処分する。

イ 窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

発病を認めたら直ちに防除する。

2 紋枯病

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
やや少	穂ばらみ中期（出穂14日前） 平年初発生日：7月6日

(2) 予報の根拠

ア 前年の発生量は平年に比べやや少なかったため、伝染源である菌核の量はやや少ないと考えられる（-）。

イ 気象予報では、7月の気温は平年並みである（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

防除適期は穂ばらみ中期（出穂14日前頃）で、防除の目安は発病株率15～20%である。

<防除のポイント>

出穂期を過ぎた薬剤散布は効果が劣るので、適期防除を徹底する。

3 セジロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	防除適期予測図参照 (5月26日、6月25日頃に飛来があったと推測され、主要な飛来は6月25日頃と考えられた。)

(2) 予報の根拠

- ア 初確認は、5月26日(平年5月29日)で平年並みであった(±)。
- イ 予察灯における誘殺数(4か所、5月11日～6月26日合計)は、185頭(平年289.6頭)で平年並みであった(±)。
- ウ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は37.5%(平年37.4%)、10株当たり虫数は0.5頭(平年1.0頭)で平年並みであった(±)。
- エ 近年、長期持続型箱施用剤の普及率が高い(-)。
- オ 気象予報では、7月の気温は平年並み、降水量は平年並みである(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

- ア 防除の目安は、飛来がみられる7月中旬頃までは成虫で株当たり10頭以上である。なお、6月下旬の巡回調査地点では株当たり10頭以上のほ場は認められなかった。
- イ 穂ばらみ中期(出穂14日前頃)までは成虫、幼虫を含めて株当たり50頭以上の発生となれば薬剤防除を行う。
- ウ 穂ばらみ期に老令幼虫や成虫が多発生すると褐変穂を生じる恐れがあるので、7月20日頃に穂ばらみとなる作型ではセジロウンカの密度を必ず確認する。

<防除のポイント>

- ア 今後、梅雨明けまで多飛来する可能性があるため、ほ場での発生や発生予察情報に注意する。
- イ 薬剤は株元によくかかるように散布する。

JPP-NET病害虫発生予測システム

	6月	7月
飛来日	25	1 5 10 15 20 25
セジロウンカ	△ 5月26日 ○ ○ ○ ○ A A A A	A A A A A - - - - - ○ ○ ○ ○ ○ @ @ ○ ○ ○ ○ A A A A A A - -
☆ ○ 6月25日	A A A A A A	A - - - - - ○ ○ ○ ○ ○ @ @ ○ ○ ○ ○ ○ A A A A A A A - - - -

調査月日 2007年 6月 29日
 凡例 A: 成虫 - : 卵 ○ : 幼虫 @ : 防除適期
 ☆ 主要な飛来 ◎ 多飛来 ○ 並飛来 △ 少飛来

図 セジロウンカの防除適期予測図

4 トビイロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	—

(2) 予報の根拠

- ア 6月26日時点で飛来は確認されていない(平年初確認:6月23日)(-)。
- イ 予察灯における誘殺数(4か所、5月11日~6月26日合計)は、0頭(平年0.6頭)で平年並みであった(±)。
- ウ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%(平年0.3%)、10株当たり虫数は0頭(平年0.001頭)で平年並みであった(±)。
- エ 気象予報では、7月の気温は平年並み、降水量は平年並みである(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

- ア 防除の目安は、6月下旬~7月中旬(飛来時)は10頭/100株、7月下旬~8月上旬(成幼虫)は20頭/100株以上である。
- イ 7月下旬にはほ場の密度調査を実施する。
- ウ 7月19日頃に長期予報を発表するので参考にする。

<防除のポイント>

- ア 今後、梅雨明けまで多飛来する可能性があるため、ほ場での発生や発生予察情報に注意する。
- イ 薬剤は株元の基部によくかかるように散布する。

5 コブノメイガ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	—

(2) 予報の根拠

- ア 6月29日に山口市のマレーズトラップで初確認(平年6月23日)され、平年に比べやや遅かった(-)。
- イ 山口市のマレーズトラップでの誘殺数(6月1日~30日)は6頭(平年7.6頭)で、平年並みであった(±)。
- ウ 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%(平年0.7%)、被害株率は0%(平年0.1%)で平年並みであった(±)。
- エ 気象予報では、7月の気温は平年並み、降水量は平年並みである(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

- 葉色の濃いイネに好んで飛来するため多肥を避ける。

<防除判断>

ア 成虫の払い出し調査で5頭/m²以上であれば粉剤は7日後に、粒剤は直ちに散布する。

イ 減収が問題となるのは、出穂期に上位2葉の被害葉率が15%（株率80%程度に相当）以上とされている。

<防除のポイント>

今後、梅雨明けまで多飛来する可能性があるため、ほ場での発生や発生予察情報に注意する。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	出穂後発生を確認したら防除を実施する。穂揃期と穂揃期7日後の2回防除を基本とする(粉剤)。

(2) 予報の根拠

ア 予察灯での誘殺数（4か所、5月6半旬～6月5半旬合計）は、アカスジカスミカメは188頭(平年39.7頭)で平年に比べ多く、クモヘリカメムシは0頭(平年0.7頭)、アカヒゲホソミドリカスミカメは6頭(平年11.8頭)で平年並みであった(+)。

イ 極早期栽培地域におけるイネ科雑草地の20回すくい取り調査ではアカスジカスミカメ等が確認され、平年に比べやや多かった(+)。

ウ 気象予報では、7月の気温は平年並み、降水量は平年並みである(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

出穂2週間前までに畦畔等の草刈りを実施し、それ以後は、エノコログサ、メヒシバ、ヒエ等のイネ科雑草の穂がでないよう管理する。

なお、7月14日～22日は県内一斉草刈り運動推進期間とする。

<防除のポイント>

ア 畦畔に出穂したイネ科雑草がある場合は畦畔も含めて防除を実施する。

イ 休耕地や雑草地周辺はカメムシ類による被害が多いので注意する。

ウ 地域で一斉防除を実施すると効果が高い。

エ 本年は、極早期等出穂期の早いほ場ではカメムシ類の被害が発生する可能性が高いので、ほ場周辺の草刈りと2回の防除を徹底する。

オ アカスジカスミカメの発生が多いほ場では、粒剤防除も有効である。防除時期は出穂期～穂揃期である。

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	幼果期、新梢の伸長期、 台風の来襲前

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は22.7%（平年22.8%）、発病葉率は1.0%（平年2.4%）、発病果率は0%（平年0.4%）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では7月の気温、降水量は平年並みで、日照時間は少ない（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

○発生が見られる園で、6月下旬の防除を実施していない場合

7月上旬に防除を実施する。

台風の来襲の恐れがある場合は、事前に防除する。

○発生が見られる園で、既に6月下旬の防除を実施している場合。

病斑の増加が見られる場合や台風の来襲の恐れがある場合は防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 発病した枝や葉は伝染源となるので、できるだけ除去する。

イ 温州みかんなどかいよう病に比較的強い品種でも多発することがあるので、発生状況に注意し、発病が認められた場合には防除を行う。

ウ 防風樹や防風ネットを整備し、強風により枝葉や果実に傷が付くのを防ぐ。

エ コサイドDFやZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、薬害を防ぐため炭酸カルシウム水和剤（クレフノン）200倍を加用する。

オ ICボルドー66Dを高温期に使用すると薬害を生じやすいので、7月から9月の使用は避ける。また、マシン油乳剤との1か月以内の近接散布も避ける。

カ ミカンハモグリガ（エカキムシ）の被害は本病の発生を助長するので、防除を徹底する。とくに隔年交互結実園の遊休樹や幼木では注意する。

2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	6月上中旬の防除後、累積降水量が200～250mmに達したとき、または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は100%（平年99.1%）、発病葉率は28.3%（平年43.8%）、発病果率は7.4%（平年7.2%）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では7月の気温、降水量は平年並みで、日照時間は少ない（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

予防散布が基本であるので、(1)予報内容の「防除時期」により防除を実施する。

<防除のポイント>

樹冠内の枯れ枝や放置された剪定枝は本病の伝染源となるので、園外に持ち出して処分する。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	防除の目安を超えたとき 寄生葉率30～40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5～1頭以上

(2) 予報の根拠

6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率77.3%（平年59.3%）、寄生葉率12.8%（平年7.9%）でやや多かった（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

防除の目安は、寄生葉率が30～40%以上、または雌成虫密度が1葉当たり0.5～1頭である。

<防除のポイント>

ア 発生量はほ場によって大きく異なる。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。

イ 葉裏までムラなくかかるよう十分な葉量をていねいに散布する。

4 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	幼果期（7月上～中旬）

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率27.3%（平年8.6%）、被害果率0.7%（平年0.2%）で平年に比べやや多かった（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

- ア タイベックシート等の光反射シートマルチで成虫の寄生が低下する。
- イ 寄生植物であるイヌマキ、サンゴジュの防風垣を防風ネットに変える。

<防除のポイント>

- ア 果梗部の被害を防止するためには、幼果期の防除を実施する。
- イ イヌマキ、サンゴジュが周囲に植えてあるほ場では、刈り込むときにカンキツ園にチャノキイロアザミウマが移動するため、この時期には薬剤防除を行う。

5 ミカンサビダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	<防除判断>参照

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率4.5% (平年0.5%)、被害果率0.3% (平年0.2%) で平年に比べやや多かった (+)。
- イ 巡回調査による初確認は、6月下旬 (平年8月下旬) で、平年より早かった (+)。

(3) 防除対策

<防除判断>

常発園または昨年多発した園では直ちに、それ以外の園では梅雨明け直後に薬剤散布を行う。

<防除のポイント>

効果の高い薬剤 (サンマイト水和剤、オサダンフロアブル、ダニカット乳剤、コテツフロアブル等) を使用する。薬剤抵抗性が発達しやすいため、同系統薬剤の連用は避ける。

ナ シ

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	梅雨明けまでは5日～7日ごとに防除

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬の巡回調査では、発生ほ場率80.0% (平年79.0%)、発病葉率3.6% (平年2.4%)、発病新梢率18.6% (平年19.6%) で平年に比べやや多かった (+)。
- イ 気象予報では7月の気温、降水量は平年並みで、日照時間は少ない (±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 落下した果実は病気の伝染源となるため、土中に埋める等の処分を徹底する。
- イ 7月は徒長枝での発病が多くなる時期なので、梅雨明けまでは5～7日間隔で、徒長枝の先端まで薬剤がかかるよう、ていねいに散布する。降雨が続く場合は雨間散布を実施する。
- ウ ポリオキシシン剤は県内全域で、ロブラール剤は一部の地域で耐性菌が発生しているため、年1回程度の使用にとどめる。

果樹全般（モモ、ナシ）

1 カメムシ類（チャバネカメムシ、ツアカメムシ、クキカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	園地への飛来を確認した時

現況は予察灯調査による

(2) 予報の根拠

- ア 果樹カメムシ類の越冬量と相関の高い前年のスギ、ヒノキの花粉飛散量が平年並みであったことから、果樹カメムシ類の越冬量は平年並みと考えられた(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

例年被害が発生する園では、ネット（網目4mm以下）で園全体を覆い侵入を防ぐ。

<防除判断>

被害を受けることの多い園では、園内の発生状況や周辺の灯火を観察し、飛来がある場合は防除する。

<防除のポイント>

カメムシ類に対する飛来時以外の薬剤散布は効果がないだけでなく、ハダニやカイガラムシの増殖を招く場合があるため、スケジュール散布はしない。

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年(%)	平年(%)	
イネ	ツマグロヨコバイ	平年並	平年並	前年並	12.5	14.1	防除適期：第2世代幼虫最盛期（7月上旬）
	イチモンジセセリ	平年並	平年並	多	15.0	9.9	防除適期：予想若齢幼虫最盛期（7月下旬）葉色が濃く軟弱な生育の場合被害が大きい。
	ニカメイガ	やや少	やや少（予察灯）	前年並（予察灯）	—	—	鱗翅目害虫に効果のある長期持続型箱施用剤を利用している場合、追加防除は必要ない。
カンキツ	そうか病	平年並	平年並	前年並	18.2	18.7	り病葉、り病果は見つけしだい除去する。
ナシ	黒星病	平年並	平年並	前年並	0	4.0	

Ⅲ 病害虫・農薬情報

病害虫メモ

ダイズのカメムシ防除

山口県でダイズを加害する吸実性カメムシ類はホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ等が主体です。イチモンジカメムシはホソヘリカメムシとほぼ同時期に発生しますが、アオクサカメムシはやや遅れて主に平坦地で発生します。吸実性カメムシ類の多発生年に防除時期を誤ったり、防除をしないと収穫皆無となった事例も報告されています。防除は、6月播種の場合、幼莢期（開花期後30日頃）と子実肥大期（開花期後45～50日頃）の2回防除、山間地等で多発生した場合には開花期後20～50日の間に3回以上が必要となります。吸実性カメムシ類は長期間周辺から侵入するため残効の長い薬剤の使用が好ましいでしょう。

<防除のポイント>

吸実性カメムシ類の防除は2回を基本としていますが、主要種であるホソヘリカメムシを主体に考えると重要なのは子実肥大期（9月頃）の防除です。ホソヘリカメムシの成虫侵入量が8月中下旬頃から多くなるため、9月頃に増加する幼虫をいかに抑えるかが被害軽減の鍵となります。山口県では今まで開花期後45～50日頃がダイズほ場で幼虫が増加し始める時期と適合していましたが、近年作型の多様化や品種の変動などにより、従来の開花時期を基準にした防除時期が必ずしも防除適期とはならない場合も出てきました。そのため、ほ場で9月頃の吸実性カメムシ類の幼虫が増加する

時期を把握して防除することが重要です。さらに、雑草が多いダイズほ場では防除を実施しても効果が劣る場合があるため、除草も重要なポイントとなります。



アオクサカメムシ



イチモンジカメムシ



成虫



幼虫

ホソヘリカメムシ

(専門研究員 本田善之)

イチゴの土壌病害

土壌病害は、土壌中に残っている植物の残渣等に生存する病原菌により引き起こされます。イチゴの主要な土壌病害には、萎黄病（フザリウム菌）、萎凋病、疫病、そして炭疽病があります。発病すると株全体を枯死させるものが多く、発生すると甚大な被害となります。これら土壌病害を防ぐためには、以下の点に注意しましょう。

1 育苗管理

- (1) 病気の出ていないほ場及び親株からの採苗を行いましょ。
- (2) 育苗用培土は、新しいものを使用しましょ。
- (3) ポット等の資材についても専用の消毒液で消毒しましょ。
- (4) 炭疽病や疫病は、主に水を介して伝染するので、雨よけ育苗や高設育苗を実施しましょ。

2 本ほの土壌消毒

- (1) 土壌病害が発生していた場合には、7～8月にかけて必ず土壌消毒を実施しましょ。
- (2) 土壌消毒には、太陽熱を利用する方法とクロルピクリン剤等の農薬を使用する方法があります。
- (3) 太陽熱消毒は、夏の暑い時期に実施します。耕起したほ場に十分量の灌水を行い、古ビニール等でマルチをし、約1か月間蒸し込み処理を行います。十分な消毒効果を得るためには、マルチ内の地表面温度が平均40℃必要です。
- (4) クロルピクリン剤により消毒する場合には、農薬のラベルを確認し、使用方法、使用量、使用時期を守りましょ。

(専門研究員 鍛冶原寛)

IV 参考

1 予報の見方

(1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

(注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる)

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（6月29日福岡管区气象台発表）

予 報	低い(%) 少ない	平年並(%)	高い(%) 多い
気 温	30	40	30
降 水 量	30	40	30
日照時間	40	30	30

週ごとの気温傾向

予 報	低い(%)	平年並(%)	高い(%)
1 週 目	20	50	30
2 週 目	30	40	30
3～4週目	30	40	30

3 7月のテレホンサービスの内容（予定）TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	7月の発生予報、イネ葉いもちの発生状況と防除、イネ害虫の発生状況と防除 果樹カメムシの発生状況と防除
中旬	イネいもち病の防除、トビイロウンカの長期予報、イネ害虫の発生状況と防除 イチゴの病害虫防除
下旬	イネいもち病、紋枯病の防除、イネ害虫の発生状況と防除